

巾零 Lie 群に付随する Gelfand 対

京大 理 菊地 克彦 (Katsuhiko KIKUCHI)

§ 0 序

N を連結かつ単連結な巾零 Lie 群, K を N に自己同型として作用する compact 群とする. すると, K は群代数 $L^1(N)$ にも自己同型として作用する. $L^1(N)$ の K 不変元全体のなす部分代数を $L_K^1(N)$ で表す. このとき, 対 $(K; N)$ が N に付随する Gelfand 対 (以下単に Gelfand 対) であるということ, $L_K^1(N)$ が可換であることとする. Benson-Jenkins-Ratcliff によると, $(K; N)$ が Gelfand 対ならば, N は高々 2-step である. ([BJR]). 今回は, 一般の 2-step 巾零 Lie 群について, $(K; N)$ が Gelfand 対であることの判定を, Heisenberg 群の場合に帰着させる方法を論じる. これは本質的には Carcano の判定条件に依存するが, その際に使われる N の既約 unitary 表現の代わりに, その表現に自然に付随する Heisenberg 群を用いて判定するという方法である.

その応用例として, N の Lie 代数 \mathfrak{N} の中心 $\mathfrak{Z}(\mathfrak{N})$ と導来 ideal $[\mathfrak{N}, \mathfrak{N}]$ が異なる場合の様相を論じる. その際, compact 群 K の $\mathfrak{Z}(\mathfrak{N})$ への作用が Gelfand 対の判定に強く関わることを反例を用いて示す.

さらに, K が n 次 torus T^n の場合の, $(K; N)$ が Gelfand 対となる条件を決定する. これは, Leptin が $[L]$ において行, た $[\mathfrak{N}, \mathfrak{N}] = \mathfrak{Z}(\mathfrak{N})$ の場合の結果の拡張をなすものである.

なお, 以下において, 中零 Lie 群は常に連結かつ単連結を仮定する.

§ 1 準備

\hat{N} を N の既約 unitary 表現の同値類のなす空間とし, Fell 位相が入っているとする. $\pi \in \hat{N}$ とするとき, $h \in K$ について N の表現 π_h を $\pi_h(x) = \pi(h \cdot x)$ で定義する. すると, π_h も N の既約 unitary 表現になる. K における π の安定化部分群を K_π とする: $K_\pi = \{h \in K \mid \pi_h \simeq \pi\}$. π の表現空間を \mathcal{H}_π とするとき, $h \in K_\pi$ に対して, ある \mathcal{H}_π 上の unitary 作用素 $W_\pi(h)$ が存在して, $\pi_h(x) = W_\pi(h) \pi(x) W_\pi(h)^{-1}$ ($x \in N$). W_π は K_π の \mathcal{H}_π 上の射影表現になる. compact 群の unitary 表現の理論と同様にして, W_π は K_π の既約射影表現の直和に分解される:

$$W_\pi = \sum c(T, W_\pi) T.$$

ここで, $c(T, W_h)$ は W_h における T の重複度である.

定理 1.1. [C] 以下の3つの条件は同値である:

- (1) $(K; N)$ は Gelfand 対.
- (2) 任意の $\pi \in \hat{N}$ について $c(T, W_h) \leq 1$.
- (3) ある稠密な部分集合 $S \subset \hat{N}$ が存在し, 任意の $\pi \in S$ について $c(T, W_h) \leq 1$.

\hat{N} の部分集合 S に対し, $S \cdot K = \{\pi_h \mid \pi \in S, h \in K\}$ とおく.

系 1.2. 定理 1.1. の各条件は, 次の条件とも同値である:

- (4) $S \cdot K$ が稠密になるような $S \subset \hat{N}$ が存在し, 任意の $\pi \in S$ について $c(T, W_h) \leq 1$.

Kirillov の理論によると, 余随伴軌道の空間 \mathfrak{n}^*/N と \hat{N} には 1 対 1 対応がある ([Ki]). さらに, \mathfrak{n}^*/N に \mathfrak{n}^* からの商位相を入れると, この対応は同相になる ([Br]). l に対応する N の既約 unitary 表現を π_l と表す. いま, K の \mathfrak{n}^* への右作用を $(l \cdot h)(X) = l(h \cdot X)$ ($l \in \mathfrak{n}^*, h \in K, X \in \mathfrak{n}$) で与える. すると, $(\pi_l)_h \simeq \pi_{l \cdot h}$. さらに, $((\text{Ad}^*(\alpha)l) \cdot h)(X) = (\text{Ad}^*(h^{-1} \cdot \alpha)(l \cdot h))(X)$ ($\alpha \in N, l \in \mathfrak{n}^*, h \in K, X \in \mathfrak{n}$).

よって, $(\text{Ad}^*(N)l) \cdot K = \text{Ad}^*(N)(l \cdot K)$ ($l \in \mathfrak{n}^*$). このことにより, 系 1.2. における S として, $\{ \text{Ad}^*(N)l_\alpha \cdot K \}$ が \mathfrak{n}^* において稠密になるような $\{ l_\alpha \}_{\alpha \in A}$ について, $\{ \pi l_\alpha \}_{\alpha \in A}$ をとればよい.

§ 2 Heisenberg群への帰着

まず, $(2n+1)$ 次 Heisenberg 群 H_n の場合について考える. \mathfrak{h}_n を H_n の Lie 代数, K を自己同型群 $\text{Aut}(\mathfrak{h}_n)$ の compact 部分群とする. \mathfrak{h}_n の中心 $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$ は K 不変であり, K は compact だから, $\{1\}$ または $\{ \pm 1 \}$ を像にもつ K の character χ が存在し,

$$h \cdot \chi = \chi(h) \chi \quad (\chi \in \mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n), h \in K).$$

いま, K が $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$ に自明に作用しているとしよう. \mathfrak{h}_n における $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$ の K 不変な補空間を V とする. このとき, V に適当な複素構造 I 及び複素内積 ω をとることにより, K は ω に関する unitary 群の部分群とみなせる.

H_n の既約 unitary 表現で, 中心において自明でないものは λ の central character で決定される. $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$ の生成元を T とし, central character χ_λ を $\chi_\lambda(\exp tT) = e^{i\lambda t}$ ($t \in \mathbb{R}$) とおくと, 対応する H_n の既約 unitary 表現を R_λ と表す. $\{ R_\lambda \}_{\lambda \neq 0}$ は \hat{H}_n において稠密である. 定理 1.1 より, $\{ R_\lambda \}_{\lambda \neq 0}$ のみ考察すればよい. R_λ を Fock model で実現する.

$\lambda > 0$ に対し, \mathcal{H}_λ ($\mathcal{H}_{-\lambda}$) を V 上全体で正則 (反正則) な関数 f であつて, $\int_V |f(w)|^2 e^{-\frac{\lambda}{2}|w|^2} dw < +\infty$ となるもの全体のなす Hilbert 空間とする. ただし, dw は V を \mathbb{R} 上 vector 空間とみたときの Lebesgue 測度. 表現 R_λ は次の形で与えられる:

$$(2.1) \quad (R_\lambda(z, t) f)(w) = e^{\sqrt{\lambda} t - \frac{\lambda}{2} w \bar{z} - \frac{\lambda}{4} |z|^2} f(w+z),$$

$$(2.2) \quad (R_{-\lambda}(z, t) f)(w) = e^{-\sqrt{\lambda} t - \frac{\lambda}{2} w \bar{z} - \frac{\lambda}{4} |z|^2} f(w+z), \quad (\lambda > 0)$$

$\lambda > 0$ のとき, \mathcal{H}_λ は正則多項式環 $\mathbb{C}[V]$ を, $\mathcal{H}_{-\lambda}$ は反正則多項式環 $\overline{\mathbb{C}[V]}$ をそれぞれ稠密に含む.

$h \in K$ は, central character を不変にすることにより, K における R_λ の安定化部分群は K 自身になる. $h \in K$ に対し, \mathcal{H}_λ 上の unitary 作用素 $W_\lambda(h)$ を次で定義する:

$$(W_\lambda(h) f)(w) = f(h^{-1} \cdot w), \quad (f \in \mathcal{H}_\lambda, w \in V).$$

簡単な計算により, $R_\lambda(h \cdot (z, t)) W_\lambda(h) = W_\lambda(h) R_\lambda(z, t)$ となることが分かる. 明らかに $W_\lambda(h_1 h_2) = W_\lambda(h_1) W_\lambda(h_2)$. さらに, $\mathbb{C}[V]$ は W_λ について不変であり, W_λ の $\mathbb{C}[V]$ 上の作用は $\lambda > 0$ のとり方に依らない. $\lambda < 0$ のときも, 正則関数を反正則関数に読み換えれば同様の議論がなされる. よつて, ただ1つの実数 $\lambda_0 \neq 0$ について考察すればよい.

命題 2.1. [BJR] $(K; H_n)$ が Gelfand 対であるのは、ある $\lambda_0 \neq 0$ について W_{λ_0} が高々重複度 1 に既約分解されるときである。

話を一般の 2-step 中零 Lie 群 N に戻そう。 N の既約 unitary 表現の構造を考える。 $\mathfrak{l} \in \mathfrak{h}$ に対し、 \mathfrak{n} 上の交代形式を次で定義する:

$$B_{\mathfrak{l}}(X, Y) = \mathfrak{l}([X, Y]), \quad (X, Y \in \mathfrak{n}).$$

この $B_{\mathfrak{l}}$ を用いて、 \mathfrak{n} の部分空間 $\mathfrak{n}(\mathfrak{l})$, $\mathfrak{b}(\mathfrak{l})$ を次で定義する:

$$(2.3) \quad \begin{aligned} \mathfrak{n}(\mathfrak{l}) &= \{X \in \mathfrak{n} \mid B_{\mathfrak{l}}(X, Y) = 0 \quad \forall Y \in \mathfrak{n}\} \\ \mathfrak{b}(\mathfrak{l}) &= \mathfrak{n}(\mathfrak{l}) \cap \ker \mathfrak{l} \end{aligned}$$

命題 2.2. $\mathfrak{l} \in \mathfrak{h}$ を 0 でない元とする。このとき、

- (1) $\mathfrak{n}(\mathfrak{l})$ は \mathfrak{n} の ideal である。
- (2) $\mathfrak{b}(\mathfrak{l})$ は \mathfrak{n} の ideal である。
- (3) $\dim(\mathfrak{n}(\mathfrak{l})/\mathfrak{b}(\mathfrak{l})) = 1$.
- (4) $\mathfrak{l}|_{\mathfrak{n}, \mathfrak{n}} \neq 0 \Leftrightarrow \mathfrak{n}(\mathfrak{l}) \neq \mathfrak{n}$. このとき $\dim(\mathfrak{n}/\mathfrak{b}(\mathfrak{l})) > 1$.

さらに、

$$\begin{aligned} \mathfrak{Z}(\mathfrak{n}/\mathfrak{b}(\mathfrak{l})) &= \mathfrak{n}(\mathfrak{l})/\mathfrak{b}(\mathfrak{l}), \\ (\mathfrak{n}/\mathfrak{b}(\mathfrak{l})) / (\mathfrak{n}(\mathfrak{l})/\mathfrak{b}(\mathfrak{l})) &\cong \mathfrak{n}/\mathfrak{n}(\mathfrak{l}). \end{aligned}$$

$\mathfrak{n}/\mathfrak{n}(\mathfrak{l})$ は可換だから, $(\mathfrak{n}/\mathfrak{b}(\mathfrak{l}))$ は $(2n+1)$ 次 Heisenberg 代数 \mathfrak{h}_n に同型になる. ただし $n = \frac{1}{2} \dim(\mathfrak{n}/\mathfrak{n}(\mathfrak{l}))$. $B(\mathfrak{l}) = \exp \mathfrak{b}(\mathfrak{l})$ とおく. すると, $B(\mathfrak{l}) \setminus N$ は $(2n+1)$ 次 Heisenberg 群に同型になる. \mathfrak{l} に対応する N の既約 unitary 表現を $\pi_{\mathfrak{l}}$ とすると, $\pi_{\mathfrak{l}} \cong \mathbb{D}_{\mathfrak{l}_0} \circ \rho_{\mathfrak{l}}$ と表される. ただし, $\rho_{\mathfrak{l}}$ は N から $B(\mathfrak{l}) \setminus N$ への自然な射影であり, $\mathfrak{l}_0 \in (\mathfrak{n}/\mathfrak{b}(\mathfrak{l}))^*$ は $\mathfrak{l} = \mathfrak{l}_0 \circ \rho_{\mathfrak{l}}$ なる元, $\mathbb{D}_{\mathfrak{l}_0}$ は \mathfrak{l}_0 に対応する $B(\mathfrak{l}) \setminus N$ の既約 unitary 表現である.

補題 2.3. $\mathfrak{l}, \mathfrak{l}' \in \mathfrak{g}^*$ とする. このとき

$$\pi_{\mathfrak{l}} \cong \pi_{\mathfrak{l}'} \iff \begin{cases} (1) & \mathfrak{n}(\mathfrak{l}) = \mathfrak{n}(\mathfrak{l}'), \\ (2) & \mathfrak{l}|_{\mathfrak{n}(\mathfrak{l})} = \mathfrak{l}'|_{\mathfrak{n}(\mathfrak{l})}. \end{cases}$$

証明は. 例えば [M, p1164, Theorem 2.3 (3)]

この補題から, 容易に次が得られる.

補題 2.4 $k \in K$, $\pi = \pi_{\mathfrak{l}}$ とする. このとき,

$$k \in K_{\pi} \iff \begin{cases} (1) & \mathfrak{n}(k\mathfrak{l}) = k \cdot \mathfrak{n}(\mathfrak{l}), \\ (2) & \mathfrak{l}|_{\mathfrak{n}(k\mathfrak{l})} = \mathfrak{l}|_{\mathfrak{n}(\mathfrak{l})}. \end{cases}$$

ここで, 次で与えられる $\text{Aut}(N)$ の部分群を考える:

$$\text{Aut}(N)_{\pi} = \{ \varphi \in \text{Aut}(N) \mid (\pi)_{\varphi} \cong \pi \}.$$

ただし, $(\pi)_k(x) = \pi(\varphi(x)) \quad (x \in N)$. すると K_π は $\text{Aut}(N)_\pi$ の部分群とみなせる. $p_\pi: N \rightarrow B(\ell) \setminus N$ を自然な射影とし, 写像 Φ_π を次で定義する:

$$(2.4) \quad \Phi_\pi: \text{Aut}(N)_\pi \ni \varphi \mapsto \bar{\varphi} \in \text{Aut}(B(\ell) \setminus N).$$

ただし, $\bar{\varphi}(p_\pi(x)) = p_\pi(\varphi(x)) \quad (x \in N)$. すると, 補題 2.3. より Φ_π は well-defined であり, $\Phi_\pi(K_\pi)$ は $B(\ell) \setminus N$ の中心を不変にする.

定理 2.5. $(K; N)$ が Gelfand 対であるということは, すべての $\lambda \in \mathcal{N}$ について, $\pi = \pi_\lambda$ を対応する N の既約 unitary 表現とするとき, $(\Phi_\pi(K_\pi); B(\ell) \setminus N)$ が Gelfand 対になるということである.

証明 定理 1.1. により, $\lambda_{(m,n)} \neq 0$ のときのみ考えればよい. $\lambda \in \mathcal{N}$ に対し, ある $\lambda_0 \in (\mathcal{N}/\mathcal{B}(\ell))^+$ が存在して $\pi_\lambda \subseteq \mathcal{D}_{\lambda_0} \circ p_\lambda$ となる. すると,

$$\pi_\lambda(k \cdot x) = \mathcal{D}_{\lambda_0}(\Phi_\pi(k) p_\lambda(x)), \quad (k \in K_\pi, x \in N)$$

\mathcal{D}_{λ_0} はある R_{λ_0} に同値とみなせるから, $\Phi_\pi(K_\pi)$ の intertwining 表現 W が存在して,

$$\mathcal{D}_{\lambda_0}(\Phi_\pi(k) p_\lambda(x)) = W(\Phi_\pi(k)) \mathcal{D}_{\lambda_0}(p_\lambda(x)) W(\Phi_\pi(k))^{-1}.$$

よって, $W_\pi = W \circ \Phi_\pi$ とすると, W_π は π_λ と $(\pi_\lambda)_k$ を intertwine

する:

$$\pi_Q(h \cdot x) = W_\pi(h) \pi_Q(x) W_\pi(h)^{-1}.$$

よって,

$$c(T, W_\pi) \leq 1 \quad \forall T \in K_\pi \iff c(T', W) \leq 1 \quad \forall T' \in \mathfrak{K}_\pi(K).$$

このことと, 定理 1.1. 及び 命題 2.1. を組み合わせることにより主張を得る. (証明終)

§ 3 反例

ここで 定理 2.5. の応用例を与える. N を 2-step 中零 Lie 群, \mathfrak{n} をその Lie 代数とする. $\mathfrak{Z}(\mathfrak{n})$ を \mathfrak{n} の中心, $[\mathfrak{n}, \mathfrak{n}]$ を \mathfrak{n} の導来 ideal を表す. \mathfrak{n} が 2-step なので, $[\mathfrak{n}, \mathfrak{n}] \subset \mathfrak{Z}(\mathfrak{n})$. 今, $[\mathfrak{n}, \mathfrak{n}] \neq \mathfrak{Z}(\mathfrak{n})$ なる場合を考える. K を \mathfrak{n} に自己同型として作用する compact 群とする. すると \mathfrak{n} 上に K 不変な実内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ が存在する. この内積について \mathfrak{n} と $\mathfrak{Z}(\mathfrak{n})$ を分解する:

$$(3.1) \quad \mathfrak{n} = \mathfrak{n}' \oplus \sigma \oplus [\mathfrak{n}, \mathfrak{n}],$$

$$(3.2) \quad \mathfrak{Z}(\mathfrak{n}) = \sigma \oplus [\mathfrak{n}, \mathfrak{n}].$$

$\mathfrak{n}_1 = \mathfrak{n}' \oplus [\mathfrak{n}, \mathfrak{n}]$ とおく. すると, \mathfrak{n}_1 は \mathfrak{n} の部分代数になり, $\mathfrak{Z}(\mathfrak{n}_1) = [\mathfrak{n}_1, \mathfrak{n}_1] = [\mathfrak{n}, \mathfrak{n}]$. さらに, σ, \mathfrak{n}_1 は \mathfrak{n} の ideal であり,

$$(3.3) \quad \mathfrak{n} = \mathfrak{n}_1 \oplus \sigma.$$

N_1, A をそれぞれ \mathfrak{n}_1, σ に対応する N の部分群とする.

命題 3.1. $(K; N)$ が Gelfand 対ならば, $(K; N_1)$ も Gelfand 対である.

この命題の逆を考える. $[L]$ や $[BJR]$ においては, $L_K^1(N)$ と $L_K^1(N_1)$ の可換性は同値と記述されている. しかし, $L_K^1(N_1)$ の可換性から $L_K^1(N)$ の可換性は得られない. このことについての反例を以下で述べる.

N を $\mathbb{C} \times \mathbb{C} \times \mathbb{R}$ に同相な中零 Lie 群, \mathcal{N} をその Lie 代数とし, その括弧積は次下与えられるものとする:

$$[(z_1, z_2, t), (z'_1, z'_2, t')] = (0, 0, -\operatorname{Im} z_1 \bar{z}'_2).$$

$K = T$ とし, K は \mathcal{N} に次のように作用する:

$$e^{F\theta} (z_1, z_2, t) = (e^{F\theta} z_1, e^{F\theta} z_2, t).$$

この節の初めの記号を用いると以下のようになる:

$$\mathcal{N}(\mathcal{N}) = \mathbb{C} \times 0 \times \mathbb{R}, \quad [\mathcal{N}, \mathcal{N}] = 0 \times 0 \times \mathbb{R},$$

$$\mathcal{N}_1 = 0 \times \mathbb{C} \times \mathbb{R}, \quad \mathcal{N} = \mathbb{C} \times 0 \times 0.$$

容易に分かるように, \mathcal{N} は 3 次 Heisenberg 代数と同型になる. N_1 は \mathcal{N}_1 に対応する N の部分群とする.

定理 3.2. $(K; N_1)$ は Gelfand 対である. しかし $(K; N)$ は Gelfand 対ではない.

証明 N_2 は 3 次 Heisenberg 群に同型で, $K = \mathbb{T}$ だから $(K; N_2)$ は Gelfand 対になる ([BJR]). $(K; N)$ が Gelfand 対でないことを示そう. \mathcal{N} の基底として以下のものをとる:

$$E_1^R = (1, 0, 0), \quad E_1^I = (\sqrt{-1}, 0, 0),$$

$$E_2^R = (0, 1, 0), \quad E_2^I = (0, \sqrt{-1}, 0),$$

$$T = (0, 0, 1).$$

$\lambda \in \mathcal{N}$ を $\lambda(z, z, t) = \operatorname{Re} z + t$ とする. すると, $\mathcal{N}(\lambda) = \mathbb{Z}(\mathcal{N})$, $\mathcal{B}(\lambda) = \mathbb{R}E_1^I + \mathbb{R}(T - E_1^R)$ となり, $\mathcal{N}/\mathcal{B}(\lambda)$ は 3 次 Heisenberg 代数に同型になる. $e^{\sqrt{-1}\theta} \in K$ について,

$$\lambda(e^{\sqrt{-1}\theta}(z, 0, t)) = x_1 \cos \theta - y_1 \sin \theta + t.$$

ただし, $z = x_1 + \sqrt{-1}y_1$ ($x_1, y_1 \in \mathbb{R}$). π を λ に対応する既約 unitary 表現とすると, $K_\pi = \{1\}$. よって, $\overline{\mathbb{Z}}_\pi(K_\pi) = \{1\}$. 然るに, $(\overline{\mathbb{Z}}_\pi(K_\pi); \mathcal{B}(\lambda) \setminus \mathcal{N})$ は Gelfand 対ではない. 定理 2.5 より, $(K; N)$ は Gelfand 対ではない. (証明終)

(3.3) より, $N = N_2 \times A$ である. 故に $L^1(N) = L^1(N_2) \otimes L^1(A)$ となる. しかし, 定理 3.2 より, $L^1_k(N)$ は $L^1(A)$ のいかなる部分代数 B に対して, $L^1_k(N_2) \otimes B$ とは表されない.

§ 4 Leptin's Problem

N を 2-step 中零 Lie 群とし, $K = \mathbb{T}^n$ が N に自己同型として

作用しているとする. Leptinが $[L]$ において提示した次の問題を考えてみよう.

問題 4.1. $(K; N)$ が Gelfand 対となるのはどのようなときか?

例えば, (\mathbb{T}^n, H_n) は Gelfand 対である (CHRJ). $[n, n] = \mathbb{Z}(n)$, かつ \mathbb{T}^n が効果的に作用しているとき, Leptin は $[L]$ において以下のような解答を与えた:

$(\mathbb{T}^n; N)$ が Gelfand 対になるのは, N が $(H_2)^n$ の中心部分群による商群で, \mathbb{T}^n が $(H_2)^n$ に自然に作用しているときである. このとき, \mathbb{T}^n は $\mathbb{Z}(N)$ に自明に作用する.

そこで, $[n, n]$ が $\mathbb{Z}(n)$ の場合について考察し, 問題 4.1 の完全な解答を与える. (3.2), (3.2), (3.3) の分解を再び用いる. \hat{K}^r を既約実 K 加群の同値類全体のなす族とする. すると, \hat{K}^r は \mathbb{Z}^n / n と同一視される. ただし $\alpha \sim \beta \Leftrightarrow \beta = \pm \alpha$ ($\alpha, \beta \in \mathbb{Z}^n$). 代表系を固定することにより \hat{K}^r を \mathbb{Z}^n の部分集合とみなす. π , σ をさらに isotypic な実加群の直和に分解する:

$$(4.1) \quad \pi = \sum_{\alpha} V_{\alpha}^{\pi}, \quad \sigma = \sum_{\alpha} V_{\alpha}^{\sigma}.$$

0でない $\alpha \in \mathbb{Z}^r$ に対し, V_α を次の性質をもつ 2 次実 K 加群 $\mathbb{R}X_\alpha + \mathbb{R}Y_\alpha$ とする:

$$(4.2) \quad (\exp U \cdot X_\alpha, \exp U \cdot Y_\alpha) = (X_\alpha, Y_\alpha) \begin{pmatrix} \cos \alpha(U) & -\sin \alpha(U) \\ \sin \alpha(U) & \cos \alpha(U) \end{pmatrix}.$$

ただし $U \in \mathbb{R}$, \mathfrak{R} は K の Lie 代数とする. $\alpha = 0$ のときは V_α は 1 次自明実 K 加群とする. V'_α, V''_α はそれぞれ V_α の重複度 $m_{\alpha,1}, m_{\alpha,2}$ の直和と考える.

$$(4.3) \quad V'_\alpha = m_{\alpha,1} V_\alpha = \sum_{i=1}^{m_{\alpha,1}} V'_{\alpha,i}, \quad V''_\alpha = m_{\alpha,2} V_\alpha = \sum_{i=1}^{m_{\alpha,2}} V''_{\alpha,i}.$$

\mathbb{R}^r の部分集合 S_1, S_2 をそれぞれ以下のものとする:

$$(4.4) \quad S_1 = \{\alpha \in \mathbb{R}^r \mid m_{\alpha,1} \neq 0\}, \quad S_2 = \{\alpha \in \mathbb{R}^r \mid m_{\alpha,2} \neq 0\}$$

定理 4.2. $(K; N)$ が Gelfand 対であるのは, 以下の 5 つの条件を満たすときである:

- (1) $m_{0,1} = 0$.
- (2) S_1 は 1 次独立な集合.
- (3) $m_{\alpha,1} = 1, \forall \alpha \in S_2$.
- (4) $\mathbb{R}\text{-Sp}(S_1) \cap \mathbb{R}\text{-Sp}(S_2) = 0$.
- (5) K は $[n, n]$ に自明に作用する.

この定理を証明するために, 次の補題を用意する.

補題 4.3. K を n 次 Compact 可換 Lie 群 (必ずしも連結ではない) とし, K は H_n に自己同型として効果的に作用しているとする. このとき, $(K; H_n)$ が Gelfand 対となるのは $n=m$ のときである.

このことは, [BJR], Theorem 5.17 の証明より分かる.

定理 4.2 の証明の概略 第 1 段: V_1, V_2 を互いに直交する \mathcal{N} の K 不変部分空間とする. このとき $[V_1, V_2] = 0$ ([BJR, p107] Leptin の定理の証明を参照). 特に $[V'_\alpha, V'_\beta] = 0$ ($\alpha, \beta \in S$) となることが分かり, $[V'_\alpha, \mathcal{N}] = 0$. よって $m_{\alpha 1} = 0$. これにより (1) が示された. また, 任意の $0 \neq \alpha \in \mathbb{R}^r$ について,

$$[\exp t\alpha \cdot X_\alpha, \exp t\alpha \cdot Y_\alpha] = [X_\alpha, Y_\alpha], \quad (t \in \mathbb{R}).$$

このことと, $[V'_{\alpha, i}, V'_{\beta, j}] = 0$ ($i \neq j$) より, K は $[\mathcal{N}, \mathcal{N}]$ に自明に作用していることが分かる. よって (5) が示された.

第 2 段: (2) ~ (4) を示す. $\mathfrak{l} \in \mathcal{N}$ を $\mathfrak{l}([V'_{\alpha, i}, V'_{\beta, i}]) \neq 0$ ($\alpha \in S, 1 \leq i \leq m_{\alpha 1}$), かつ $\mathfrak{l}(X_{\beta, i}) = 1, \mathfrak{l}(Y_{\beta, i}) = 0, \mathfrak{l}|_{\mathcal{N}} = 0$ なるものとする. このとき, $\mathfrak{n}(\mathfrak{l}) = \mathfrak{Z}(\mathcal{N})$ であり, $\mathfrak{n}/\mathfrak{B}(\mathfrak{l}) \cong \mathfrak{g}_m$. ただし, $m = \sum_{\alpha \in S} m_{\alpha, 1}$. $\pi = \pi_{\mathfrak{l}}$ を \mathfrak{l} に対応する N の既約 unitary 表現とすると,

$$K_{\mathfrak{l}} = \{k \in K \mid k \cdot X = X \quad \forall X \in \mathfrak{Z}(\mathcal{N})\}.$$

$\mathfrak{k}_{\mathfrak{l}}$ を $K_{\mathfrak{l}}$ の Lie 代数とする. すると,

$$\begin{aligned} \mathbb{F}_\pi &= \{U \in \mathbb{R} \mid U \cdot X = 0 \quad \forall X \in \mathbb{Z}(n)\} \\ &= \bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta. \end{aligned}$$

このとき, K_π の元は $\text{Aut}(\mathbb{R}/\mathbb{Q})$ に誘導される. この対応を (2.4) と同様に取ると, π の微分 $d\pi$ は, \mathbb{F}_π から導分代数 $\text{Der}(\mathbb{R}/\mathbb{Q})$ への写像になる. このとき,

$$\begin{aligned} \ker d\pi &= \{U \in \mathbb{F}_\pi \mid \alpha(U) = 0 \quad \forall \alpha \in S_1\} \\ &= \left(\bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \cap \left(\bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right). \end{aligned}$$

定理 4.3 より,

$$\begin{aligned} m &= \dim d\pi(\mathbb{F}_\pi) \\ &= \dim \left(\bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right) - \dim \left(\left(\bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \cap \left(\bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right) \right) \\ &\leq n - \dim \left(\bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \\ &\leq \# S_1 \leq \sum_{\alpha \in S_1} m_{\alpha,1} = m. \end{aligned}$$

これらの不等号はすべて等号になる. よって (2) ~ (4) は示された.

第3段: 逆に (1) ~ (5) が満たされているとする. このとき $(K; N)$ が Gelfand 対であることを示す. そのためには, 定理 2.5.1 における \mathcal{I} として, 最大次元の余随伴軌道に属するもののみを考えればよい. まず, (1) ~ (3) より,

$$[V_\alpha, V_\beta] = 0, \quad (\alpha, \beta \in S_1, \alpha \neq \beta).$$

が得られる. このことにより, \mathcal{I} を通る余随伴軌道が最大次元となるのは, $\mathcal{I}(V_\alpha, V_\beta) \neq 0$ ($\alpha \in S_1$) となるときである.

よって, $\mathcal{I}(V_\alpha, V_\beta) \neq 0$, $\mathcal{I}(V_\alpha, V_\beta) = 0$. したがって $\mathcal{I}(V_\alpha, V_\beta) \neq 0$ ($\beta \in S_2$,

$1 \leq j \leq m_{B,2}$) としてよい. このとき, $\mathcal{N}(\mathcal{Q}) = \Sigma(\mathcal{N})$ であり,
 $\mathcal{N}/\mathcal{O}(\mathcal{Q}) \cong \mathfrak{g}_m$, ただし $m = \#S_2$. $\pi = \pi_{\mathcal{Q}}$ を \mathcal{Q} に対応する既約
 unitary 表現とすると, (5)より,

$$K_{\pi} = \{b \in K \mid b \cdot b = I \text{ on } \Sigma(\mathcal{N})\}$$

$$R_{\pi} = \{U \in \mathbb{R} \mid U\chi = 0 \quad \forall \chi \in \mathcal{O}(\mathcal{Q})\} = \bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta$$

第2段と同様に写像 $\Phi_{\pi}: K_{\pi} \rightarrow \text{Aut}(\mathcal{N}/\mathcal{O}(\mathcal{Q}))$ を考えると, Φ_{π} の微分 $d\Phi_{\pi}$ について,

$$\ker d\Phi_{\pi} = \left(\bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \cap \left(\bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right).$$

よって, (1)~(4)より,

$$\begin{aligned} \dim d\Phi_{\pi} &= \dim \left(\bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right) - \dim \left(\left(\bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \cap \left(\bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right) \right) \\ &= \dim \mathbb{R} - \dim \left(\bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \\ &= \#S_1 = m \end{aligned}$$

補題 4.3. より, $(\Phi_{\pi}(K_{\pi}); \mathcal{B}(\mathcal{Q}) \setminus \mathcal{N})$ は Gelfand 対. 定理 2.5 より,
 $(K; \mathcal{N})$ は Gelfand 対であることが分かる. (証明終)

Reference

- [BJR] C. Benson, J. Jenkins, and G. Ratcliff: On Gelfand pairs associated with solvable Lie groups; Trans. Amer. Math. Soc. 321 (1990), 85-116.
 [Br] I. D. Brown: Dual topology of a nilpotent Lie group;

Ann. Sci. École Norm. Sup. 6 (1973), 407-411.

[C] G. Carcano: A commutativity condition for algebras of invariant functions; Boll. Un. Mat. Italiano 7 (1987), 1091-1105.

[HR] A. Hulanicki, and F. Ricci: A tauberian theorem and tangential convergence of bounded harmonic functions on balls in \mathbb{C}^n ; Invent. Math. 62 (1980), 325-331.

[ki] A. Kirillov: Unitary representations of nilpotent Lie groups; Russ. Math. Survey 17 (1962), 53-104.

[L] H. Leptin: A new kind of eigenfunction expansion on groups; Pacific J. Math. 116 (1985), 45-67.

[M] K.G. Miller: Parametrices for hypoelliptic operators on step two nilpotent Lie groups; Comm. in Partial Differential Equations, 5 (11), (1980) 1153-1184.